

かたりべ115

豊島区立郷土資料館・ミュージアム開設準備だより

作品を見る読む

4

— 鶴田吾郎 —



鶴田吾郎《池袋への道》1946年、油彩・カンヴァス、52.9×80.5cm、豊島区蔵



【左中央部分】

左中央に描かれた白く見える建物は、現在も立教大学に隣接する旧江戸川乱歩邸の土蔵だという。人が集っている場所はヤミ市か。左下には、今は暗渠となった谷端川が描かれている。

池袋の奥の私の画室から、四、五丁も出ると、都内にかけて一面の焼野原である。僅かな荷を背負った男や女が、自然と道ができた踏み跡を行ったり来たりしている。池袋の駅跡近くには闇市がならび、なんでも食物となるものなら、人が集まって買い込むのだった。(中略) 人々はこの大きな自然の法則が空襲下でも、また戦い終って静かになつた空にもあることを、一向関心なきが如く、ただ如何にしてその日その日を生きるべきかを考え、暗くなった道を辿り、壕の中に入ったり、焼け残った家に戻るのだった。

私はなんでも描いておきたいと思った。

鶴田吾郎『半世紀の素描』中央公論美術出版、一九八二年、一六四頁

大きな荷を背負う人々が、道とも言えぬ道をただ黙々と歩いています。茜色に染まりつつある青空と、足元に伸びる影とが、その日の終わりが近いことを告げています。右の絵のタイトルは「池袋への道」です。作者は、一九二六(昭和元)年から豊島区に住み続けた画家・鶴田吾郎(一八九〇―一九六九)です。鶴田のアトリエは、要町二丁目にありました。

絵の背景について述べた鶴田自身の言葉が残っています。描く鶴田の姿をも彷彿とさせる文章として、ここでご紹介します。

この絵は、豊島区の約七割を焼いた一九四五(昭和二〇)年四月の城北大空襲から約一年後の、一九四六(昭和二一)年二月に描かれました。むき出しの地肌を覆う緑色の草が、時の経過と同時に、町が未だ復興には程遠い状態であることを伝えます。鶴田のアトリエは焼け残りましたが、従軍した次男と三男は戦死し二度と戻ることはありませんでした。従軍画家として活躍していた鶴田自身を含め、戦時下を生き延びた人々は、それぞれが何らかの影を伴いつつ敗戦後を生きることになります。《池袋への道》に描かれているのは、ビルや住宅が乱立する現在の池袋からは想像もつかない風景と、そこに生きる人々の姿です。作者の眼を通して過去の記憶を辿ること。それも絵画作品の持つ重要な役割の一つと言えるでしょう。(美術 清水)

昭和二〇年代の小学校社会科教科書にみる新しい教科書観

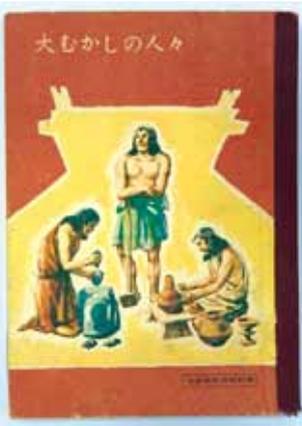
秋の収蔵資料展「博物館資料になった学びの道具」読む・書く・触れる・着る・運ぶ」において、「小学校国語以外の教科書・戦後の教科書についても収蔵資料を紹介してほしい」というご意見を多くいただきました。そこで本号では、アジア・太平洋戦争直後、昭和二〇年代の小学校社会科教科書から、戦後の新しい教科書観について探っていきます。

社会科は、敗戦とその後の教育制度改革によって、一九四七(昭和二二)年四月の六・三制の義務教育からなる新学制スタートと同年に設置された新しい教科です。これは、戦前にあった歴史科・地理科・修身科・公民科を単に組み合わせたものではなく、子どもの社会認識の形成と発達にかかわる教科・基本的人権尊重のための教科として新たに誕生しました。



① たろう

それに合わせて順次発刊された文部省著作小学校社会科教科書が、二年生用『まさおのたび』、三年生用『たろう』(①)・『大むかしの人々』(②)、四年生用『日本のむかしと今』(③)、五年生用『村の子ども』(④)・『都会の人たち』(⑤)、六年生用『土地と人間』(⑥)・『気候と生活』(⑦)です。写真は、昭和二〇年代に発刊された東京第二師範学校男子部附属小学校などで使用された館蔵の教科書です。



② 大むかしの人々

くん、みつこさん、となりのおじさんの三人で博物館・動物園に出かけ、周辺の街並みについても叙述されています。『大むかしの人々』では、主人公「明くん」が森で遊んでいるうちに道に迷い、困った事で原始生活について考察するところから話が始まります。高学年用教科書の巻末には、「教師および父兄の方々へ」として「従来の教科書と同じように考えてはいけません。むしろ児童用の参考書的一种として取り扱っていただきたい」「教師は児童が印刷された本だからといってこれを無批判に受け入れることのないように指導を加えてほしい」と付記されています。これらから、教科書そのものの学習ではなく、教科書を利用して学ぶことに性格を改めた戦後の新しい教科書観がうかがえます。(郷土 甲田)



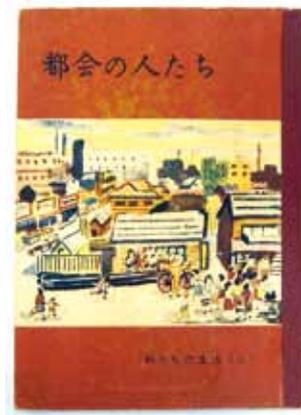
③ 日本のむかしと今

参考文献

唐沢富太郎著『教科書の歴史』一九五六年
滋賀大学附属図書館編『近代日本の教科書のあゆみ―明治期から現代まで―』二〇〇六年



④ 村の子ども



⑤ 都会の人たち



⑥ 土地と人間



⑦ 気候と生活

高田町の児童数増加と第五小学校の増築計画

豊島区目白2丁目に位置する目白小学校は、平成二六年(二〇一四)一〇月に新しい校舎が落成し、85周年を迎えました。昭和四年(一九二九)の創立当時には、高田第五尋常小学校と呼ばれており、当初の児童数は604名で16学級でしたが、七年には児童数1220名、クラス数も22学級になっています。

大正から昭和期にかけて、豊島区内の旧町の多くでは、急速な市街地化が進められ、高田町の戸数は約7倍(1万2042戸)で、人口は約4倍(4万9978人)になっており、児童数も激増したと考えられます。実際にどのくらいかといえますと、一学級(4〜6学年)の平均児童数が70〜79人で、上級学年では二部授業を実施していて、24の教室が不足していたと記されています。町内の児童数増加は、教育上切実な課題でした。

その児童数の増加にともない、昭和七年に校舎の増築と屋内体操場の建設が計画されました。これまで、かたりペー10号などでご紹介しました「旧高田町公文書」には、その建設に関する社会背景について書かれた資料が残されています。



昭和8年「豊島区詳細図」より高田第五小学校・目白駅・学習院付近を一部抜粋

「屋内体操場建設ノ必要ナル理由」という文書によれば、①運動場の敷地が細長い地形であること、②目白駅付近であるため自動車の交通が頻繁であること、③道路の喧騒のため音声を通らないことが理由として記されています。実際に、昭和八年発行の「豊島区詳細図」をみると、その地理的状況が確認できます(なお、水道局営業所は元高田町役場です)。

また、場内に御真影奉安殿を設けて式場とし、記念日の際には講話を行う、講堂としての使用目的がありました。その他にも、修身科の合同訓話や合唱歌などを行う教室として使われたようです。



昭和15年「皇紀二千六百年高田第五小学校創立満十周年記念写真帖」(桜井静子氏寄贈)より掲載写真を引用

一方、校舎増築と屋内体操場の建設の背景にはある構想がありました。将来、東京市との併合を見すえて、第五小学校を高田町の中枢とし、学習院と対峙して将来の都市発展のため重要な位置にすることが計画されており、市内の各小学校全てに屋内体操場を建設することがその処置であると考えられていました。

当時、下水道事業などにより町財政の歳出は膨張の一途をたどっており、経費節減も重要な課題でした。多くの文書は

増築資金を公債に求めるために残されたものですが、これらの建設は失業者救済のための事業でもあったようです。

左写真の工事設計書によれば、木造スレート葺二階建の校舎一棟約970㎡、木造重鉛板葺一階建の雨天体操場約344㎡、鉄筋コンクリート造の奉安庫一ヶ所5㎡などがみられます。鉄骨鉄筋コンクリート工法が、小学校建築にも応用されたのが昭和初め頃とあるので(「学校ことはじめ事典」)、屋内体操場は都市部でも珍しかったと推測されます。



第五小学校校舎及附属家増築工事設計書

昭和二〇年四月一三日の城北大空襲の際には、校舎の大部分が焼失したため、屋内体操場を6つに仕切って授業が行われたこともあったようです(創立五十周年記念誌「めじろ」)。三七年四月には、講堂の取り壊し作業を開始し、翌年に講堂兼体操場が新築されました。今はもう見ることができない「屋内体操場」は資料の中にその軌跡を遺しています。(郷土高木)

高田の納め太刀

■氷川神社で見つかった納め太刀

平成二五（二〇一三）年三月一九日、東目白千登世町会から当館に、大山講に
関係する木製の納め太刀が二本寄贈されました。これらの太刀は、関東大震災や四月一三日空襲などの災禍をくぐり抜けて、現在の氷川神社（高田二丁目）境内の神興蔵の中にひっそりと眠っていました。太刀のひとつは、写真1に掲載した、長さ約三・六メートル、重さ約一〇キログラム、鍔の厚さは約六・五センチメートルの大ぶりの太刀です。人間の身長をゆうに越してしまふもので、とても迫力があります。もうひとつは、写真2に見える小ぶりの太刀で、長さは約一・七メートル、重さ約一・五キログラム、鍔の厚さは約四センチメートルの太刀です。



写真1
納め太刀を持つ調査員の身長は176cm。写真1の太刀は身長の上、写真2の太刀は身長と同じ大きさ。



写真2
写真1の太刀は身長の上、写真2の太刀は身長と同じ大きさ。

小ぶりといっても、男性の平均身長ほどの大きさです。両方の太刀ともに二つの目釘穴がはつきりあり、太刀らしさがよく表れています。写真1の太刀の表銘には、墨書で「奉納大山不動明王石尊大権現大天狗諸願成就」とあり、願いが記されています。裏銘には「寛政六年寅□□月為□□□□高田四ツ家上町講中」といった年号や地名が書かれていました。一方、写真2太刀の表銘には、墨書で「阿夫利神社□□」とあり、裏銘には「高田□□□□」と見えます。このことから少なくとも

も寛政六（一七九四）年に、高田四ツ家の講中の人々によって製作されたものであることがわかります。高田四ツ家とは、写真3のあたりで、現在の千登世橋のすぐ近くだともわれます。正徳六（一七一六）年の「豊島郡下高田村絵図」で見ますと、百姓居屋敷が立ち並ぶところであったようです。資料調査では、資料に残された墨書・紀銘などを調べることが大変重要な鍵となり、大山講が行われていた地域を示す大きな手掛かりとなりました。

■大山講と納め太刀

大山講とは、富士講に並ぶ江戸の参詣講のひとつです。神奈川県にある大山を信仰する講として発達をした大山講は、



図1 大正10（1921）年 高田四ツ家周辺の地図
（「豊島区地域地図 第四集（改定版）」より作成）
地図に見える十字路が現在の千登世橋。その東側に「四ツ家」とある。現在の住所では雑司が谷二丁目のあたり。

雨乞いの山として、農民を中心に大変信仰を集めたと伝えられています。納め太刀は大山講と深く関わるものです。その歴史は古く、源頼朝が戦勝祈願のために太刀を奉納したことが始まりといわれています。その後、江戸時代には、庶民の間で流行し、雨乞いや招福除災のために、大山にある阿夫利神社へ木製の納め太刀を奉納したそうです。今回の納め太刀も、そのような用途であったと考えられます。しかし今では高田四ツ家の地域で大山講を知る人や、納め太刀について詳しく知る人を探せませんでした。今後も高田における大山講の実態を明らかにしていきたいです。（郷土資料館調査員 山本）

「旧鈴木家住宅」の資料たち

第2回 フランス文学者 鈴木信太郎

前号では、「旧鈴木家住宅」の特徴と軌跡について紹介しました。本号では、一九一八年以来、大塚の地に居を構え、多くの研究書や翻訳本を世に出し、後継者を育て上げた、フランス文学者の鈴木信太郎について紹介いたします。

鈴木信太郎（一八九五—一九七〇）は、日本におけるフランス文学研究の礎を築いた重要な人物です。とりわけ、一九世紀後半の象徴派の詩人ステファヌ・マラルメ研究では、第一人者として尊い仕事を成し遂げました。著書に『ステファヌ・マラルメ詩集考』や『フランス詩法』といった研究書の他、戯曲『シラノ・ド・ベルジュラック』の翻訳でも親しまれています。その専門性の高さゆえに、一般にはあまり馴染みのない人物かもしれませんが、



書齋でくつろぐ鈴木信太郎（73歳）
撮影／菅原 幸男、1968年

今日、日本においてフランス文学が学問として定着し、フランス本国でも難解と評されるマラルメの詩の研究がこれほどまでに発展した背景に、彼の存在があったことは決して無視できないでしょう。

東京神田の裕福な米穀問屋に生まれ、地主の長男として何不自由なく育てられた信太郎は、法律を学ぶことを望んでいた親の期待に反し、やがてフランス文学への道を歩むようになります。信太郎は一九一三年に東京高等師範学校付属中学を卒業、同年九月に第一高等学校に入學し、そこで、親の目を欺くように仏法科（フランス法学）を専攻しています。もともとこれは、法律ではなく、フランス語を学ぶためで、三年時には親に内緒で文科へと転科してしまいます。こうして信

太郎は、一九一六年七月に一高を卒業し、同年九月に東京帝国大学の文科大学（現在の東大文学部）へと進学し、フランス文学者への道を歩み出します。在学中に仲間を集め刊行した同人誌「玫瑰珠」には特に熱心に取り組み、短編小説や翻訳を次々

と発表しました。

当時、世間の文学に対する考え方は、家を破綻させるものとして恐れられていたでしょう。こうした彼の選択は、両親をひどく落胆させました。しかし、「子供の頃から、家を守って行けばいいのだから法律を勉強しろ、と言われて育てられた」信太郎は、「何もしないでよいなら、法律の代わりに一生文学でも読んで暮らさうか」などと皮肉にも考えたのでした。

信太郎がなぜフランス文学を専攻したのかについては、もう一つ興味深いエピソードがあります。中学生の時に、学校帰りに本屋で手に取ったメーテルランク（マーテルリンク）の英訳劇が、なんとすらすらと読めたことから、「いい気になつて仏文学をやる気になったのかも知れない」という信太郎自身による思い出話です。こうした彼の言葉は、随筆として残され、補巻を含め全六巻の『鈴木信太郎全集』の中にも収められています。信太郎は一九一九年七月に大学を卒業すると、翻訳や研究を続けながら文学部の副手や大学講師を勤めます。その後、フランスへの約一年間の留学を経て、一

九三一年に東京帝国大学助教授に、四七年には同大学教授に就任します。以降、日本におけるフランス文学・語学の研究体制を確立し、門下からは多数の逸材を出しました。

研究者として重要な功績をのこした信太郎は、同時に熱心な稀覯本の収集家でもありました。中でもマラルメと、フランス近代画家のエドゥアール・マネが共同で製作した『大鴉』や『半獣神の午後』といった挿絵入り限定本は、信太郎が収集した愛蔵書のうち最も貴重なもの一つとして挙げられるでしょう。

これらは、多くの研究書とともに、いざれ「仮称鈴木信太郎記念館」の書齋にて、彼の直筆原稿や愛蔵の品々と合わせて展示される予定です。本連載「鈴木家住宅」の資料たちは、こうした貴重な資料を信太郎の人柄とともに、少しずつ紹介していくものです。次回は、再び建物についての紹介になります。（郷土 古賀）

※本欄は、鈴木道彦著『フランス文学者の誕生』（筑摩書房、二〇一四年）の記述を参照しました。

「旧鈴木家住宅」は、豊島区東池袋五丁目に所在する歴史的建造物で、正確には「豊島区指定有形文化財（建造物）旧鈴木家住宅」という名称です。現在豊島区では、この建物を改修・整備して「仮称」鈴木信太郎記念館を開設する準備を進めています。

豊島区文学散歩 — 歴史と文化が息づく街、 雑司が谷を歩く —

近年、雑司が谷が歴史と文化の街として注目を集めています。昨年は、「雑司が谷がやがや」プロジェクトが、日本ユネスコ協会連盟が推進する「プロジェクト未来遺産2014」に登録されました。かつて雑司が谷周辺には、秋田雨雀、菊池寛、野村胡堂、三角寛ら多くの文化人が居住していました。今回は雑司が谷をめぐるながら、文化人の足跡を辿ってみたいと思います。

まずは有楽町線護国寺駅から、不忍通り沿いを目白通り方面に向かって直進します。七分ほど歩き、コンビニの角を右折すると、右手にマンションが見えます。そこは、戯曲「父帰る」や小説「真珠夫人」などを執筆した菊池寛が昭和一二年から晩年まで居住していた場所です。菊池は、作家活動以外にも、雑誌『文藝春秋』の創刊や、芥川賞・直木賞の制定など、文壇に大きな貢献を果たしています。現在、邸宅は残っていませんが、かつての活躍を偲ばせる「菊池寛旧宅跡」の碑が残されています(①)。

続いて、坂を上ること五分、雑司が谷旧宣教師館に到着します(②)。明治四〇

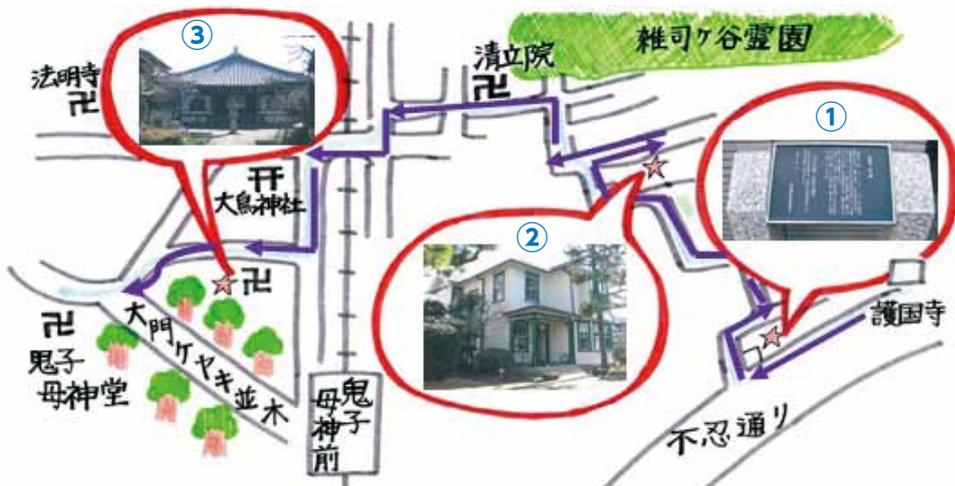
年にアメリカ人宣教師、マッケレーブの邸宅として建てられた、豊島区内に現存する最古の近代木造洋風建築です。館内には、雑司が谷での近代文化活動を紹介する展示コーナーや、豊島区ゆかりの児童雑誌『赤い鳥』の復刻版などを閲覧できる部屋があります。

旧宣教師館を出て一分ほどで、多くの文化人が眠る雑司ヶ谷霊園が見えてきます。霊園を右手に直進し、都電荒川線の線路を越えてさらに五分ほど歩くと、本納寺に着きます(③)。こちらの寺院には、小説家・劇作家として活躍した秋田雨雀の墓があります。雨雀は、明治三八年から昭和一九年までおよそ四〇年間雑司が谷に居住しており、文人仲間から「雑司が谷の梟」というニックネームをつけられるほど、この地に密着した文化人でした。

本納寺からさらに進むと、鬼子母神堂が見えます。参道の大門ケヤキ並木には、樹齢四百年を越す古木もあり、歴史を感じさせます。雨雀もこの並木に高い関心を寄せており、『雑司ヶ谷若葉集』(聖典輪読会、昭和一四年)の中で、大門並木の歴史や、江戸時代中期から度々起こって

いた訴訟について触れています。地元の保護活動が実を結び、大門ケヤキ並木は東京都の天然記念物に指定されています。近代の文化人たちの息吹が感じられる雑司が谷。皆様も地図を片手に雑司が谷の街を散策してみてください。

(文学・マンガ 安達)



編集後記

「かたりべ」一一五号をお届けします。日増しに暖かくなりますが、皆さまいかがお過ごしでしょうか。かたりべ編集作業を進めている二月末、週末の池袋駅では、河津桜を見に伊豆に向かう花見客を満載にした電車を目にしました。豊島区内のソメイヨシノの蕾はまだまだ硬いですが、本号をみなさまの手元にお届けできる三月末頃には、豊島区でもソメイヨシノが開花するのではないのでしょうか。

豊島区では五月の新庁舎オープン控えて全庁をあげて準備を進めています。郷土資料館・ミュージアム開設準備グループでも、庁舎内廊下壁面を使った新庁舎まるごとミュージアムの一部で、展示を行うため、現在、鋭意準備作業に取り組んでおり、パネル展示を中心に郷土、美術、文学・マンガの三分野それぞれが、豊島区域の歴史や文化を紹介する予定です。ほかにも現庁舎跡地の再開発計画など日々変わりゆく豊島区ですが、暖かな気候のなか郷土資料館、五月からは新庁舎に足をのばして展示を見学してみたいかがでしょうか。(郷土 甲田)

かたりべ
No.115

2015年3月24日

豊島区立郷土資料館

東京都豊島区西池袋2-37-4
豊島区立勤労福祉会館7階

電話 03-3980-2351
URL: <http://www.city.toshima.lg.jp/bunka/shiryokan>